



第17回 WaQuAC-NET ウェビナー

水道事業専門家が語る
キャリアパスと国際協力

報告:南 智大

WaQuAC-Net 会員や水道事業者関係者、今後国際協力に関わりたいと考えている人々を対象に、専門家の経験やキャリアパスについて語る座談会を開催しました。パネリストには事業者出身の JICA 専門家経験者等を迎え、将来の国際協力やキャリアパスのヒントを得ることを目的としています。

概要は以下の通り。

○日時: 2024年9月8日(日)PM8:00~9:30

○形式: Zoom 開催

○パネリスト:

廣渡 博(北九州市上下水道局職員)
尾崎 昇(元ネパール国 JICA 専門家/元堺市)
佐伯 孝志(フィジー国 JICA 専門家/元松山市)

○聴講者:

札幌市:秋田,瀬戸,遠藤/さいたま市:園田,関根,市川
/京都市:横山/大阪府:岡田/北九州市:笹田,田中
/福岡市:久保田/鹿児島市:富迫

○WaQuAC-Net メンバー:藤谷,長塩,宮下

事務局:山本,鎗内

○ファシリテーター: 南(タンザニア国 JICA 専門家/
元鹿児島市)、掛川(横浜市水道局職員)



WaQuAC-Net 第16回ウェビナー参加者の皆さん

○主な内容:

今後日本の水道事業者の国際協力への貢献:

・施設建設の設計支援や日々の運転維持管理業務経験を活かした技術移転に取り組む。

61号 目次

1. 第17回 WaQuAC-NET ウェビナー報告.....1
2. ウェビナーを振り返る.....2
3. 草の根活動報告(札幌市・ネパール).....2
4. 会員自己紹介.....3
5. 記憶に残る CP との出会い(フィジー).....4
6. 神奈川県海外技術研修生紹介報告.....5

- ・蓄積された知識を活用して、それぞれの国やセクターの課題解決に向けた活動に取り組む。
- ・国内のアウトソーシング状況を考慮しても、日常業務の事業経営の経験や見識は国際協力で強みになる。

国際協力現場での課題発見と取り組み:

- ・カウンターパートとの信頼関係を築き、膝づめで支援・助言を行うこと。
- ・相手の状況(歴史・背景)を理解し、課題に向き合うこと。

関連研修前後の変化:

- ・海外研修生と講義を受けることで得た経験や国内事業者職員との繋がりにより刺激になる経験や関係が築けたこと。
- ・国際協力に参画した方が周りにいなかったため、受講後周囲の見方に変化が感じられた。

国際協力を目指すヒトへの助言:

- ・自らの意思を継続的に発信すること。
- ・幅広い知識を持つための準備をすること。
- ・専門家経験者に相談すること。

専門家になるための準備:

- ・自己研鑽に必要な時間を確保するために必要な規則正しい生活習慣に努めた。
- ・語学力を向上させるために、常に他言語に触れるよう環境に努めた。
- ・技能の専門に限らず幅広い知識や知見を獲得するための人脈づくりやその情報収集に努めた。

全体を俯瞰してみる力の養成:

- ・短期海外経験や JICA 研修への参加により視野が広がり、他分野への興味や関心が広がったこと。
- ・企画部署でヒト・モノ・カネを踏まえた新規事業立案を経験したことで、どんなことも受け入れて

いこうというマインドが得られた。このマインドは現在の専門家業務にも生かされていると感じる。

- ・専門家派遣前の街づくりの業務経験から全体の中で水道がどうなっているかという物事を俯瞰的にみるという視点が培われた。また専門家としての業務経験を通して、よりその視点を深められてきた。

この会では、参加者からの活発な質問やパネリスト同士の意見交換が行われ、予定時間を過ぎるほど盛り上がりました。参加者アンケートでは「国際協力を自分の人生にどう組み込むかについて聞いて良かった」や、「皆様の体験やエピソードが大きなモチベーションになりました」といった意見が寄せられました。

これらの意見からも、参加者は国内事業体が今後どのように国際協力に関わるべきか、また若い世代のキャリアパスに関する貴重な話を聞く機会となったのではないかと思います。

第 17 回 WaQuAC-NET ウェビナーを振り返る

佐伯 孝志

まずは、今回のウェビナーに取り組んだメンバーを代表して、参加して下さった WaQuAC-Net のメンバーの皆様、事業体関係者の皆様、そして賛同して下さったパネリストやファシリテーターの皆様、さらに事務局のお二人に感謝いたします。

今回の取組を振り返ると、JICA 専門家を志し歩んできた道の中で、うまくいかない時にも「人との出会い」が道を開いてくれたことに気づきました。例えば、JICA 能力強化研修や WaQuAC-Net、そしてその後の仕事で出会った事業体他の皆さんとの出会いが、今の私に繋がっていると感じます。

また、この企画を通じて「やってみたい」や「取り組んでみよう」というシンプルな気持ちの積み重ねが、人生やキャリアの財産となり、揺るぎない形として現れていることを再認識しました。

最後に、今回皆様と共にこのような形で実施できたことに感謝し、特に次世代の方々には、今この記事から触れた方でも自ら志望する道に向けて「やあやあ我こそは！」と名乗りを挙げていただきたいと思います。私の経験から、その一歩が次の一歩、さらにその先へと繋がっていくものと言えます。

本当にありがとうございました。

草の根活動(札幌市・ネパール)

報告: 宮下 妙子
(ジェンテック)

ネパールへの技術協力の始まり:

現在、札幌市水道局が実施している JICA 草の根事業「ネパール国ポカラ市給配水管理業務の体系化を目指した技術協力事業」に、水質チームのご意見番として参加している宮下です。



実はこの技術協力は、札幌市がモンゴルでの草の根技術協力を終え、再度モンゴルを対象に実施するか、それとも他の国にしようかと検討している時に、当時、ネパールで水道専門家をされていた佐伯さんが来札されネパールの現状をお話して下さったことから、「次はネパールにしよう！」という気運が高まり始まったものです。

オンラインで研修スタート:

2022 年 2 月から事業が開始されましたが、あいにくのコロナ禍にあって、最初はオンラインで研修をスタート、作成した教材を YouTube で視聴してもらい、Zoom で質問に答えるという形で進めました。

昨年 8 月に、やっと対面式で第 1 回札幌研修が実現。イシュワル水道公社総裁他 6 名の研修員が来札しました。札幌史上最高気温を記録する暑さのなかでの汗だくの研修となりました。



民家の屋上には水を確保するタンクが！

初めてのネパール:

今年 2 月、第 1 回ネパール研修に同行し、初めてネパールを訪問しました。

ポカラ支所に着いてうれしかったのは、札幌研修の成果を活かし構内に漏水探知を研修する手作りのヤードが水道公社の自前で作られていたこと、それまで不在だった水質分析の担当者が配属されていたことです。

ネパール研修の中で、私は“給配水システムにおける水質管理”というテーマで講義を行い、給配水システムで発生する水質トラブル、

モニタリング項目、モニタリングポイント、水質異常時の対応、利用者からの水質に関する苦情対応についてお話ししました。最後に、「ネパールではどのような水質苦情がありますか？」と聞いた所、皆さん口々に「水が出ないこと」と答えるのです。(水質苦情と聞いたのに・・・)

ポカラで間欠給水の実態と漏水量のすごさを目の当たりにして、「水が出ないという苦情ばかり」という実態に、「さもありません！」と納得しました。間欠給水で 1 日数時間しか給水されないの、その間、目一杯水を貯めるために、各戸に貯水タンクを設置しています。

朝、給水が開始されると、民家の周りの側溝に滔々と水が流れ出します。漏水です。給水が停止されると、ピタリと止まります。これでは、水の使用量が少ない夜間に給水停止しなければ、水が逃げるばかりです。間欠給水を止めるわけにはいかないということでしょうね。

なつかしい人達と:

ネパールから帰国する前日、カトマンズでなつかしい人達と再会する機会に恵まれました。2002 年に寒冷地コースに参加されていたラナさん (Mr.Sanjeev Bickram Rana)、2019 年に課題別研修に参加されていたラビ君 (Mr.RabindraPokhrel) です。ラナさんは、現在、カトマンズ渓谷管理委員会 (KVWSMB) の事務局長をされています。ラビ君は、皆様ご存知 WaQuAC-Net 会員です。

そして、ネパール給水省に赴任されていた尾碕さんも一緒に下さいました。尾碕さんは、ラナさんやラビ君とは仕事でもおつきあいがあるとのこと、ラナさん御用達の民族ダンスのショーを上演しているレストランで、楽しく会食しました。



懐かしい人達との楽しい会食

今後への思い:

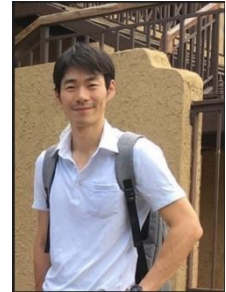
今年 12 月にはネパールでクロージングセッションが行われ、この事業は一応の終了を迎えます。あのすごい漏水量を見た私としては、是非事業を継続し、漏水探知や修繕の技術移転にとどまらず、既に今後 80 年間にわたる水道管の更新計画を策定している札幌市が、そのノウハウを活かし、ネパールの長期に平準化した管路の更新計画の作成に協力して欲しいと願っています。

会員自己紹介

中井 一孝
(丸紅株式会社)

これまでの経歴:

神戸生まれ、神戸育ち、大学院卒業後、ゼネコンに入社。愛知県の山岳トンネルの現場に配属され日々山堀り。その後、横浜市に入庁し、下水道部署と水道局を経験。水道局在籍中に JICA 本部に 3 年間出向し、円借款、無償、技プロに従事。現在は丸紅(株)環境インフラプロジェクト部にて水事業に従事。



インド国マディヤ
プラデシュ州
現地調査にて

あ、途上国のインフラ整備やりたい。

Connecting the dots.:

新しい場所に訪れるのが好きな私は、大学生の時に色々海外を放浪。発展途上国に行った際、水使えない、電気使えない、トイレ使えないに直面。子供のころ経験した阪神大震災を思い出す。「日本では災害後という非常時の状況がこの国では日常なのか。。。と衝撃を受ける。この経験から途上国のインフラ整備に関わりたいと思い至る。大学は元々希望していた学科ではない建設学科に入ったが、結果的に自分がやりたいことと繋がる。アップル創業者 Steve Jobs のスタンフォード大学でのスピーチの一節「you can't connect the dots looking forward. You can only connect them looking backwards, so you have to trust that the dots will somehow connect in your future.」を思い出す。

辞令は突然に。「ほっ？水道局ですか？」「お！JICA ですか？」

横浜市では下水道部署から水道局への異動辞令を受ける。「ほっ？水道局ですか？」正直戸惑ったが、最も基本的で途上国で整備が必要とされているインフラは水道ということを実務の中でじわじわ実感。水源から蛇口まで途切れなく運営維持管理していないと機能不全を起こす水道の難しさそれぞれゆえのやりがいも感じる。



ジャマイカ国キングストン市
漏水調査現場にて

そして、JICA への出向辞令を受ける。途上国のインフラ整備に関わることに。点と点が繋がった瞬間。JICA では無償案件、技プロ、円借款を担当させてもらう。これまで水道の技術面しか見れていなかったが、水道事業経営という視点を持つ機会となった。技術へのこだわりが技術者の自己満足に終わることなく、その技術が水道経営をどう改善させることができるのか、財務諸表のどの部分に影響を与えるのかまで技術者は思いを巡らすべきと気づかされる。

新たな境地へ:

2022 年から丸紅(株)環境インフラプロジェクト部で水事業に従事。

丸紅グループは上下水道コンセッション事業を通して約 1,500 万人に給水している。横浜市水道局と JICA で培った経験を生かし、今後は民間側で水道事業に貢献したいと考えている。



仙台市水道局と丸紅グループの技術交流会

WaQuAC-Net のみなさまへ:

子どもが小さくこれまであまり活動に参加できていませんでしたが、少し手が離れてきたので今後は少しずつ参加できるかなと思っています。専門分野の異なる経験豊富な方たちがいらっしやるのでぜひ色々勉強させていただきたいです。よろしく願いいたします。

【新企画】記憶に残る CP との出会い(フィジー)

～ Mr.Jonacani Ravouvou and
Mr. Tomasi Tuinmoala(WAF) ～
小田 弘登

はじめに:

福岡市を退職後、2010 年から 2 年間、JICA シニア海外ボランティアとしてフィジーで上水道の安定給水や漏水対策の技術協力活動を行いました。この経験を通じて出会った現地のカウンターパート(CP)を紹介します。



Mr. Joe との出会いと活動例(赴任 1 年目):

フィジー到着後、首都スバでの研修を経て、ラウトカに赴任。ナンディ・ラウトカ地区の担当となり、当地区漏水対策プロジェクトリーダーである Mr. Joe と出会った。フィジー人らしく体格がよく、圧倒されそうな威圧感があるが気はやさしそうである。すぐに彼の部屋で進捗中のプロジェクトの説明を受けたが全体図もなく、すぐには理解できなかった。その日の午後は、Mr. Joe の案内で、配水管敷設現場を視察した。



小田と Mr.Joe(当時)

その翌日から Mr. Joe の案内でナンディ・ラウトカ地区水道施設を水源から末端給水まで精力的に視察した。Mr. Joe は当地区の水道施設に詳しいので早々に施設全体を把握することができた。

そのうち Mr. Joe は現場での問題を相談してくるようになった。その時は彼の説明を聞くだけでは理解できないので、すぐに現場へ走ることにした。現場主義に徹した。Mr. Joe も現場へ走るのが好きなタイプだった。

例えば「2 階建ての apart で、1 階の水圧より 2 階の水圧が高い？」との相談があり、すぐに現場で水圧を確認したが、まさにその通りであった。もしかしたら水圧の違う配水管が道路に 2 本布設されている可能性はないか？と問うたら、わからない！ということだった。翌日道路を掘削して確認したところ、過去の低地配水池からと、その後増強された高所配水池からの配水管が併設されていることがわかった。新しい配水管を敷設するとき、旧管を 廃棄しないで 1 階への給水管を切り替えていなかったのだ。

その他にも Mr. Joe とは長年の出水不良地区の解消に成功した。また彼は私の活動を他のスタッフや上司に報告し、JICA シニアボランティアへの信頼を高めてくれた。

Mr. Tom との出会いと活動例(赴任 2 年目):

2 年目には、Mr. Tom が新たな CP として就任。赴任 1 年経過後、フィジー上下水道公社本部(スバ)でジェネラルマネージャー(技術系トップ)出席のもと、中間報告を行った結果、首都スバに滞在してスバ地区の水道事情を視察して、さらに、他の地区の水道事情も出張して視察するよう要請があった。Mr. Tom の前裁きの下、東部・中部事務所(首都



Mr. Tom と子供達(当時)

スバ周辺)や北部事務所へ出張して各地区の責任者へ提言した。また、2012 年初期の 2 度にわたる集中豪雨時に Mr. Tom とともに損壊現場を視察して早期復旧方策も提言した。

特に福岡市で 1978 年大洪水時に実施した地下水や小河川水の緊急仮取水の経験を踏まえて、バ地区(ラウトカの隣町)の取水場が豪雨で損壊していたので、導水路線途中の小河川での緊急仮取水を提案した結果、長期断水を緩和できて住民や WAF 幹部・職員に大きなインパクトを与えた。

さらに、Mr. Tom の事前交渉のおかげで子供たちの水道に対する意識高揚のためのプレゼンテーションをラウトカの小学校で行った。Mr. Tom にも感謝！感謝である。

結び:

2 年間の活動を通じて素晴らしい CP に支えられて充実した経験を得ました。帰国後もこの活動を契機として福岡市と WAF の JICA 技術協力事業が実施され、福岡市とフィジーに同行する機会に二人と再会できました。また、本邦研修の機会に Mr. Tom と福岡で再会することもできました。



左より Mr. Tom と Mr. Joe (現在)

Mr. Tom から小田さんへのメッセージ:

Bula! 小田さん!

フィジーのトム・ライとその家族からご挨拶を申し上げます。あなたと福岡のご家族が元気で過ごされていることを祈っています。フィジーであなたと出会った私たち家族(妻と娘のマテリア、孫のトミーとエズラ(現在 8 年生))は皆、元気に過ごしています。

WAF のことですが、雨期にあなたがサポートしてくださった Buabua と Varage の 2 つのポンプ場は今も大変役立っています。両方のポンプ場には既に水道本管が敷設されており、必要な時にポンプを現場に降ろすだけです。

さらに、事態が大きくなる前に修理するというあなたのモットーも今なお守っています。

小田さん、祝福された一日をお過ごしください。

神のご加護がありますように。Vinaka!

小田さんからは会報 20 号にて活動報告を頂いております。また今回、彼の CP 達のご退職を迎えるタイミングでこの新企画への投稿にご快諾頂きました。(編集者注)

神奈川県海外技術研修生紹介 ～タイ MWA(首都圏水道公社)～ 報告:山本 敬子

2024 年度神奈川県海外技術研修にタイ王国首都圏水道公社から参加している Ms. パルシリ スリルングランさんから以下の自己紹介メールが届きました。

「現在、寮で日本語を勉強していますが、これは私にとってまったく新しい挑戦です。全力を尽くして頑張りたいと思います。

氏名:

Miss. Palsiri Srirungruang

日本での生活に期待すること:

日本文化、礼儀正しさ、形式、敬意、従順さなど、素晴らしい日本の文化的価値観を学ぶ事。

日本人の礼儀正しさは興味深く、私もそうなりたいと思っています。

またこの研修を通して私が仕事に関連する水道分野の知識や最新技術を学ぶ事だけでなく、タイ王国と日本の関係がさらに発展することを期待しています。

*注 9 月半ばに来日後、まず日本語を学び、10 月から来年 2 月半ばまで水質検査・水質管理(現場視察含む)について関東学院大学や神奈川県営水道及び横浜市水道局で学び、3月初めに帰国予定です。(報告者注)



Ms. Palsiri

WaQuAC-NET 会報 第 61 号

発行: 2024 年 10 月 14 日

WaQuAC-NET 事務局(61 号編集:佐伯)

連絡先: waquac_net@yahoo.co.jp (鎗内)

URL : <https://www.waquac.net>

今後の予定: 2024 年忘年会 2024 年 12 月
会報 62 号 2025 年 1 月